

広域連携による新たな「結い」の試み

今、筆者が住んでいるのは、戸沢村という人口 6,000 人ほどの山形県の小さな村だ。そんな小さな村でも毎週のように地域行事、共同作業、会合がある。いつも驚くのは地区の公民館の行事予定表は書ききれないほどになっていることである。過疎だ、少子化だ、高齢化だと叫ばれながらも、農村の人々は元気だ。

こうした農村のバイタリティは豊かな自然環境や奥深い生活の知恵や文化を育んでいるが、その力の根源は「結い」という集落共同の絆にある、ということを書いたと思う。「結い」のような活動は集団指導体制で、すなわちみんなで知恵を出し合いながら力を合わせて行うというのを理想にしている。とはいえ、いつも話し合いがまとまるというわけではない。結構みんな自己主張が強く、どちらかというまとまらないことの方が多いうように思える。それでも最終的にはまとまっていくところが農村集落の社会運営の面白いところでもある。やはり広大な自然、農地、集落を維持していくためには互助・協働の考えが大切で、そのことが集落住民の一人一人に浸透しているのだろう。

さて、そんな村が山形県には（おそらく東北地方、あるいは日本全国にあるだろう）いくつもある。先日、山形県内でふるさと体験活動を推進している諸団体のネットワークを形成してこうという会合に出席した。いや、実に様々な活動があるのだと驚いた。森林ボランティアをしている団体、川の環境保全をしている団体、郷土料理による食育を推進している団体、はたまた民話や歴史の伝承活動に力を入れている団体など、地域に根付いた取り組みが各地にあることを知った。

ただ、残念なことに、こうした活動が狭い地域内のみには知られておらず、交流や連携があまりなかった。そのため、過疎・少子高齢化、地域経済低迷といった課題を抱える地域では活動が維持できなかつたり、マンネリ化したりするなどの問題があった。また、これらの団体が、自分達の領域以外の他団体の活動に関心を向けにくかったということもあるだろう。

今回、これらの多くの地域や団体が、自分達の自然や文化を次世代につないでいくために、ネットワークを組もうと動き始めた。筆者が住み込んでいる戸沢村の角川の里でも昨年からはじめている田んぼビオトープの活動を広げようと県と協働しながらネットワークを推進しようとしている。また、角川の里は山村集落だが、隣の庄内地域は海辺の集落が多いということで、庄内の複数の団体と交流を促進して流域連携の環境保全活動や教育旅行などを企画している。今年夏、角川の子供達達は地元の森だけでなく、庄内の海でも保全活動や交流を行う予定で、今から楽しみだ。これらの活動の醍醐味の一つは今までなかったつながりや達成感が得られるところだ。先日、角川の里で体験学習を受け入れた宮城県のある海辺の中学校に集落の住民と訪問したところ、子供達は「あ、炭焼きのおじさんが来た」「郷土料理の先生、山菜料理のお土産ありがとうございました」などと親しみのこもった再会の場を得ることが出来た。自分達の分野や領域を越えた活動は、確かに自然条件、

社会条件、日程などの点でまとまりにくいということはある。しかし、新しい発見や驚きがあったり、自分達の地域での課題解決のためのヒントを得られたり刺激的で楽しい。なにより、互助・協働の地域作りの醍醐味を知っている農村住民にとって、こうした広域的な互助・協働もまた里の活動を外から勇気づけるよすがとなるのではないだろうか。

広域連携の活動には都市住民も新たな風を運んでくれるということがある。また山形県では内外の学生もボランティアとして地元の高校生と共に活動に参加するなどの動きも出ていてこれまでにはない楽しさと活気を見せようとしている。従来ありがちだった物見遊山ではなく、外部者も実際に土地の人と汗を流していく活動は確かな足跡を地域と人々の心に刻んでいくところが特色だ。これらの活動はまだ端緒にすぎたばかりだ。しかし新たな里作りに向けた互助・協働の活動、つまり「結い」が、現代的な意味で再生し展開していこうとする可能性を感じるのである。